

事例番号 19

(1) タイトル

WEBカメラを用い、S k y p e（テレビ電話ソフト）を使った交流活動（ベッドサイド、他校）の事例

(2) 事例の対象となる児童生徒について

本校の児童生徒（在校・ベッドサイド）

(3) 使用する機器（支援機器）名称と特長

①支援機器の名称

a. 「WEBカメラ（200万画素・USB）」UVC対応

②特長

a. UVC対応のものはドライバのインストールが不要ですぐに使える。
ビデオチャットソフトと使うと双方向で遠隔地の人とも会話ができる。

(4) 使用した機器を選定した理由

WEBカメラとS k y p e（テレビ電話ソフト）の性能が上がり、実用に耐えうるものになりつつあり、なるべく高画質ですぐ接続できるUVC対応のものとした。

本校の児童生徒の実態から外出が困難な場合が多く、そのような状況のなかで顔を見ながら交流をしたいという希望が以前よりあった。既存のテレビ電話システムは高価で実用化が難しかったが、WEBカメラであれば安価にできるためこれらの機器を選定した。

(5) 選定のプロセス

簡単に接続できるもの、大型テレビに映しても画質がある程度鮮明で見るに耐えられるものを本校情報部で選定した。

(6) 個別の指導計画と個別の教育支援計画

個別の指導計画では、テレビ電話をとおして交流しコミュニケーションを図ることが自立活動として目標に掲げられている。

(7) 指導の内容

とくに記載なし

(8) 支援機器の使用効果あるいは、指導の効果と支援機器の評価

ベッドサイドの生徒は普段会うことができない友達に会って話しかけられることを心待ちにしている様子が見られた。一度ネットワークの調子が悪く予定されていたテレビ電話の交流が延期になったことがあったが、そのときに重度重複障害のあるベッドサイドの生徒が悲しそうな表情をしていた。このことから声だけではなく、顔を見ながら話すことの重要性が感じられた。交流で使用されてから、さまざまな授業場面で使用されるようになりベッドサイド学習の生徒にとってコミュニケーションの幅が格段に広がったと考えられる。

北海道という広大な地域であり，かつ病弱の特別支援学校という特性上，すぐに他校と交流するという状況が難しいのではあるが，テレビ電話による交流はこの垣根を少し越えられるような感じはある。

(9) まとめと今後の課題

ネットワークを利用する関係上，回線状況に通信品質が左右されやすく安定性をどのように確保するかが課題である。また，回線を通した顔と顔を合わせた交流にはなるが，計画的に実施しないとただ会話をするだけで終わってしまう。有用なツールではあるので，回線状況も含め計画的な利用がより効果を高めるといえる。

(10) 文献（引用文献・参考文献）



写真 1

ベッドサイドの生徒との
テレビ電話交流

※ 本事例（特別支援教育教材ポータルサイト掲載事例）は、独立行政法人国立特別支援教育総合研究所「特別支援学校におけるアシスティブ・テクノロジーの活用ケースブック－49例の活用事例を中心に学ぶ導入，個別の指導計画，そして評価の方法－」（2012/3）に記載された内容である。